

レジェンド・オブ・ゾロ

2006(平成18)年1月22日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



製作総指揮＝スティーヴン・スピルバーグ／監督＝マーティン・キャンベル／出演＝アントニオ・バンデラス／キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ／アドリアン・アロンソ／ルーファス・シーウェル／ニック・チンランド(松竹、ブエナビスタ インターナショナル(ジャパン)配給／2005年アメリカ映画／126分)

第1章

あなたは
何本見た？

……舞台は1850年のカリフォルニア。テキサスでアラモ砦が陥落した14年後だ。アメリカの31番目の州になるか否かを決める「住民投票」をめぐる善と悪の闘いがテーマ。「ゾロ」の威力は健在だが、妻と息子の占めるウエイトが大きいのが本作の特徴。したがって、人間ゾロの鑑賞とキャサリン・ゼタ＝ジョーンズによる女活劇の鑑賞もしっかりと。ところで、最大の敵をフランス人伯爵と設定したのは、ひょっとしてイラク戦争の遺恨……？

ゾロ映画における女性の地位は……？

正義の味方のマスクマン「ゾロ」は、日本でも怪傑ゾロとして古くから広く庶民に親しまれているが、私が最もなじみ深いのは、アラン・ドロン主演の『アラン・ドロンのゾロ』(75年)。ゾロのように歴史的に確立したキャラ(?)とは異なり、現代アメリカで広がったコミック誌によって新たなヒーローとなった「バットマン」や「スパイダーマン」はその歴史が浅いが、これら仮面ヒーローはすべて男性だから、その映画では男優がメインとなり、女優は刺身のツマになるのが通例。しかし近時の男女平等の要請や女性の地位の向上を目指す社会の動きの中、新たに登場したのが、女性を仮面ヒロインにした『キャットウーマン』や『エレクトラ』。

しかして、この『レジェンド・オブ・ゾロ』では、それとは違う視点から女性の地位の向上を……。さて、それはナニ……？

女性の地位向上の視点と具体的対応は？

この映画が女性の地位向上を目指すのは、ヒーローであるゾロの家庭、すなわちその妻子に大きな焦点をあて、ゾロが社会に出て虐げられている庶民のために悪と闘えるのは、家庭の支えがあるから、という視点を明確に打ち出したこと。そのため、この「ゾロ映画」では、ゾロの妻は、登場シーンの数でも、悪と闘う役割の大きさでも、ほとんどゾロと対等に並ぶところまで、その地位が向上している。

そんな、恵まれた時代におけるゾロの妻エレナを演ずるのはキャサリン・ゼタ＝ジョーンズ。1850年代カリフォルニアがスペインから独立してアメリカ合衆国の31番目の州になろうとしている時代にふさわしく、豊かな胸元を強調した長いドレスを着て登場するその美しい姿に、まずはクラクラ。そして、そんなエレナが剣を振るって活躍する大活劇にも興奮いっぱい。この「ゾロ映画」は、そんな目でエレナの活躍に十分注目を……。

1人立ちした2代目ゾロ、そして3代目の予感……？

ゾロを演ずるのは、スペイン生まれらしく彫りの深い顔立ちが目立つアントニオ・バンデラス。女性たちに大人気だが、私はそのスケベっらしい馬ヅラ(?)をあまり好きになれず、そりゃアラン・ドロンの方がよほど美男子と思えるのだが……？

それはともかく、このアントニオ・バンデラスがゾロとして初登場したのは、『マスク・オブ・ゾロ』(98年)。ここでの彼は、アンソニー・ホプキンス演ずる初代ゾロが自己の後継者として見込んだ、盗賊あがりの若者アレハンドロの役。そしてこの新旧ゾロが協力して悪と闘うものの、遂に初代ゾロは深手を負い、偉大なるゾロの魂をアレハンドロに託し、愛する娘エレナに見守られながら息を引き取るというのが、そのストーリーだった。そんな2代目のゾロも今はエレナと結婚し、最後の大事な仕事が終了すればゾロを引退して、息子とともに家族3人で安穩に暮らすつもり。

もちろんそうしたのでは映画にならないから、それをめぐる夫婦ゲンカ(?)

やドンデン返しの連続となるのだが、ここで注目したいのが息子のホアキン（アドリアン・アロンソ）。

教室の中で、老先生相手にゾロまがいの立ち回りを演じる姿に感心していたが、何とそれだけではなく、現実にもコワイ悪人相手に大車輪の活躍を見せるばかりか、ラスト近くでは愛馬トルネードに1人またがってさっそうと……。こりゃ3代目登場のための布石であることは明らか……。すると第3作目では、アントニオ・バンデラスはちょっと珍しいフケ役で登場……？

投票結果に固唾をのむのは私も同じ……

この映画のストーリーを組み立てている時代的・政治的状況のポイントは、カリフォルニアの人々が、自由と平和を夢みてアメリカ合衆国の31番目の州となる道を選択するか否かということ。そして、当然ながらそれは投票者の過半数の意思で決まることに……。

折しも、2003年3月19日に始まり、同年5月1日に終了したイラク戦争の後、イラク国民による民主主義的な政府を選出するため国民投票が2005年10月15日に行われたが、1850年にカリフォルニアで行われた住民投票もそれと同じように重要な大事業であることは明らか。したがって、その開票結果にはすべての人々が注目したはず。

ところで、私は2001年5月30日に岡山県知事の名で出された是正命令に端を発して展開されてきた岡山県津山市の再開発をめぐるさまざまな訴訟を担当してきたが、その結果は予想どおり連戦連勝。しかし問題は訴訟だけでなく、市議会での議論や三セクの役割等にも広がり、遂には市長のリコール運動まで。津山市長のリコールの可否を決める住民投票は来る1月29日と決められており、岡山地裁へ申し立てられた行政訴訟を前提とする執行停止の申立認められない限り、その投票が実施されることに。そして、リコール可とされると、次はあらためて市長選挙が実施されることになるから、私は今固唾をのんで1月29日の住民投票の成り行きを見守っているところ……。

さて、1850年のアメリカのカリフォルニアに住む人々もきっとそうだったはず。そしてゾロは、その投票に不正を持ち込み合衆国化を阻止しようとする悪党たち

に対して、庶民の味方・正義の味方として毅然と立ち上がったというわけだ。こりゃまるで、津山における坂和弁護士の役割と同じようなもの……？

『アラモ』との連続性をしっかりと

カリフォルニア州はアメリカ大陸の西の端にあるが、南東部にあるのがテキサス州。もともとアメリカ合衆国は、イギリスからはるばる海を渡ってやって来た移民たちが、開拓を続けていく中で建設した国家。1830年代初頭、テキサスはメキシコの一部としてその支配下にあった。

そんなテキサスの、メキシコによる圧政からの独立を求める戦いを感動的に描いたのがジョン・ウェイン主演の『アラモ』(60年)であり、つい最近リメイクされた『アラモ』(04年)。わずかに200名足らずの守備隊が「アラモ砦」に籠もってメキシコの大軍と戦い、12日間も砦を持ちこたえ、遂に全員「玉砕」したのは1836年春のこと。アメリカ合衆国の人たちにとって、これは合衆国建国における1つの輝かしい伝説となっている。

そのアラモ砦陥落から14年後のカリフォルニアがこの映画の舞台。1850年という時代に、合衆国の31番目の州になることを望む人たちが多かったのは、やはりメキシコと比べてアメリカ合衆国は自由の国だったから……？

夫婦喧嘩の勃発と離婚原因の可否は……？

ゾロとしての活躍を10年間も続けてきた夫が、今日の投票さえ終わればやっと引退できる、妻のエレナはそう確信していたし、夫のアレハンドロもそれを確約していた。ところが、その日2人がラブラブでベッドインした中、アレハンドロの口からは、まだ各地の投票が続く3カ月間はゾロとしてやらなければならないことがあると言い始めたから大変。2人の言い争いはエスカレートし、あの美しいエレナの口から、「今出て行くのなら、もう帰って来なくてもいい」という恐ろしい言葉まで。さらにその後、追い打ちをかけるように、アレハンドロの手元に離婚申立の書類が届いたばかりか、今なぜかエレナは、あたかも恋人同様に寄り添ってフランス人のアルマン伯爵(ルーファス・シーウェル)のワイナリーパーティーの主役の座に……。

これは一体何？ どうなっているの……？ ちょっとした1つのすれ違いから短期間にこんなにズレてしまうの……？

スティーヴン・スピルバーグが製作総指揮したこの「ゾロ映画」は、ゾロの活躍を描くばかりでなく、ゾロ＝アレハンドロのこのような内面の悩みまで掘り下げたところがミソ……？ しかし、ゾロ引退の時期についての夫婦間認識のズレはホントに離婚原因にまでなるの……？ 法学部や法科大学院の学生諸君はよく考えてみよう……。

悪党はダレ……？

サンマテオでの投票を暴力を使ってでも妨害するべく登場する悪党が、ジェイコブ・マクギブンス（ニック・チンランド）。その動機は、自由と民主主義の国に変わるとジェイコブのような前時代的かつヤクザのような支配者（？）が不要になってしまうから。つまり、ジェイコブらにとって投票の阻止は生存を賭けた闘いというわけだ。このジェイコブはいかにも悪党ヅラで恐そうだが、どうもそれはヤクザと同じく、弱い者を相手にしたときだけのよう。だって、たった1人ゾロが登場すると、東になってかかってもかなわず、コテンパンにやられてしまうのだから……。

しかしこのジェイコブは、アンチ・ゾロ（？）の代表としてこの映画のあらゆる場面でその役割を果たしている。したがって、このジェイコブに殺されるのは、後述のアレハンドロの友人のギレルモや神父。そして味方が敵かよくわからない怪しげな2人連れの男たちだが……？ さらに、このジェイコブが結びつく巨大な権力者は一体誰……？ それらに注目しながら、この悪党の果たす役割をじっくり味わいたいものだ。

土地の権利証をめぐる争いは？

広いアメリカでも土地（の所有）をめぐる争いの深刻さは日本と同じ。ちなみに中国でも、2008年開催の北京オリンピックに向けた再開発による土地買収（取り上げ？）騒動が、日に日に激しさを増していることがよく報道されている。1850年のカリフォルニアを舞台としたこの映画でも、悪党のジェイコブが狙って

いるのは、ゾロの親友のギレルモの土地。そのため、さかんに「権利証」をよこせと要求しているが、その要求には何の根拠もなく、理不尽なことは明らか。したがって、断固拒否すればそれでオーケーのはずだが、当時のカリフォルニアは現在の日本のような「法治主義」国家と異なり、銃で脅すという無法がまかり通っていた時代……？ これでは、「共産党権力」で土地を無理矢理収用している今の北京と同じ……？

他方、私が弁護士として興味を持つのは、当時のカリフォルニアにおける土地の権利証とはどんなもので、どんな効力を持っていたのかということ。しかし残念ながら、この映画の中ではそれはよくわからない……。権利証がある以上、当然土地の登記制度もあったはずだが、その完備度は？ また土地の登記は所有権移転の対抗要件、それとも効力発生要件……？

アルマン伯爵は善玉それとも悪玉？

エレナが惚れただけではなく、アレハンドロも「面白い男だ」と高く評価したアルマン伯爵は、学生時代にエレナがスペインで知り合った男。当時からエレナにぞっこんだった彼は、今フランスからアメリカのカリフォルニアに渡って巨大なワイナリーを完成させ、地元の名士におさまっているが、その正体は？

一見「いい男」だし、伯爵だけにアレハンドロよりよほど紳士。そして嫉妬に狂う離婚直前の夫アレハンドロに対する対応もそれなりに丁寧なもの。もっとも、それがかえってアレハンドロの怒りの火に油を注ぐことになるのは当然。こちら辺りのエレナをめぐる恋の鞘当てはマンガ的に面白おかしく展開されるが、これはスピルバーグ特有のもの……？

さて、このアルマン伯爵は善玉それとも悪玉？ そして彼は何のためにアメリカに渡り、ワイナリーを完成させたの？ それがこの映画の大きなテーマ。同時にそれがスピルバーグ映画らしいド派手な立ち回りと爆発・炎上シーンを生むストーリーの前提となっているから、ゆめゆめ途中で居眠りなどせず、注目を……？

2006(平成18)年1月24日記